



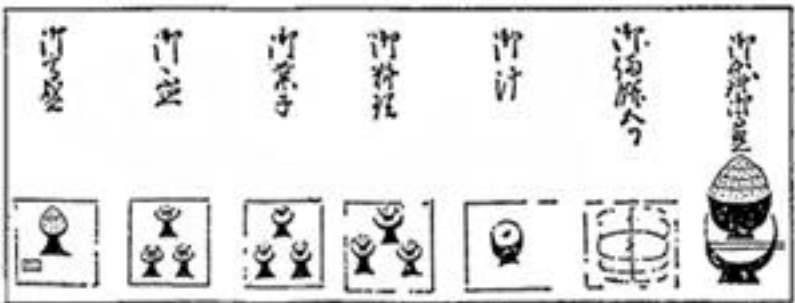
# 飯野八幡宮の神饌 献饌神事の復元に関して

齋藤 ミチ子

## 三、種々の神饌

今回神饌に関する様態が、整備復元される前の状況について、古老から聞き取りをおこなったが、双方の多少の異同の中に、近代に入り、八十八膳も七十五膳といわれて来たことなどをはじめ、注意される事項があった。例えば、生きた鶏を縛って供え、事後に放つたというのは、かつての放生会の名残を留めるものである。この部分は現行ではなくなっている。また、いかにも素朴な氏子の御馳走感覚を反映させた焼鮎の串刺しも今はない。現行（平成八年に整備復元）の神饌の種々を挙げて、「一」内は古老阿部初弥翁、明治四十年生 の記憶、次のようになる。

この品々と図と照応させると、御本鉢  
御高盛（白ふかし）、御備餅五つ（同）、  
御汁（同）、御料理（山芋から蕨まで）、  
御菓子（胡桃から栗まで）、御盃（神酒）  
となる。御料理は、現行では生のまま、  
容器に見合った大きさに切って盛ってい  
る。



- ・神酒の盃
- ・白ふかし（強飯）
- ・赤ふかし（小豆入り）も
- ・まゆ餅（楕円形、五個）
- ・丸型二重ね
- ・御汁（里芋、青さや豆）
- ・山芋
- ・かじめ
- ・大根
- ・茗荷
- ・河骨
- ・にかいも（野老）
- ・牛蒡
- ・すいき
- ・蕨
- ・胡桃
- ・柿
- ・柚
- ・栗（なし）
- ・焼き鮎の串刺し
- ・生きた鶏

これらを唐櫃に入れて、白丁を着た氏子が神殿内に運ぶ。現在は唐櫃内を二段に設えて、運搬の能率を高める工夫をしているが、以前は唐櫃一丁に三宝一個を入れては担いだので、流鏝馬が始まると同時に始めても三時間ほどかかったという。

## 四、おわりに

八十八膳献饌行事の復元事業は、現在では熟年、高齢層の人々の信仰心と伝統行事に対する熱意によって支えられていると見受けられた。一旦は、整備された行事が今後未永く保持されるには、どうすべきかが次なる問題であろう。まず壮年、中年層の理解と熱意を如何に得るかに係わっていると思われる。今回、氏子有志の方々による神饌素材の収穫から調理の過程までをつぶさに観察する機会に恵まれたが、いずれの時も共感しあえる感慨と郷愁が漂う雰囲気の中で作業は和気あいあいと進行していると観察された。それだけに、彼らのような経験のない、行事をなつかしむ心情も希薄な世代にとっては、意気を集結させ、行事を遂行させるエネルギーの核になり得るものは何か、これこそが神社側に問われる点であろう。

齋藤 ミチ子 國學院大學日本文化研究所

國學院大學日本文化研究所報 No. 206

平成十一年一月二十五日 より転載

## 献穀会年間行事

四月上旬	八十八膳献穀会 総会	十月上旬	拔穂祭
五月中旬	田打祭	十月中旬	芋煮会
五月下旬	御田植祭	十月下旬	研修旅行
八月下旬	縄奉製勉強会	十二月下旬	そば打ち
九月十五日	飯野八幡宮古式大祭	十二月下旬	忘年会
	八十八膳献饌神事	一月上旬	農立て



献饌神事の祭具

## 献饌行事に寄せて

前日の例祭の緊張感が持続している中、いよいよ古式大祭の朝を迎えた。十時発輿の神輿渡御の準備が始まった。早朝より中塩の防災センターで白ふかし、繭餅の奉製が献穀会会員の手により行われていた。

神輿渡御の直前までお清めかと思われる通り雨。行事にはさしたる支障はない。猿田彦の先導で行列は整然と進み、自分分は騎馬で神輿の直後に従う。揚土の御旅所に参着、祭典は恒の如し。頭の中を過る事は同時進行している八十八膳神饌の準備の状況であった。



八十八膳献饌行事の初見は、飯野家文書「定式控」（これは八幡宮の年中行事を記した文書で、八幡宮神職が各々書き写し手許においていたと思われる。）の中に挿絵つきで詳細に記されている。今般この文書をもとに一部省略されていた八十八膳献饌行事が復元されたのである。

まず、用具の復元が平成五年よりおこなわれ、会津の漆器店の大島半兵衛商店に修理を依頼し、約百五十点余の器が朱塗り金箔の色も鮮やかに復元された。

次いで神饌品の復元に取り掛かり、平成八年度本社本庁の神社振興対策事業として指定を受け、その事業に八十八膳献穀会の結成を取り上げ、中塩地区の神社総代等と相諮り事業内容の検討、発会式を見た次第である。

この神社振興対策事業は三カ年の助成のため、本年からは自主事業となった。今後は財政面の強化を図るべく会員の拡大が急務である。何卒趣旨をご理解賜り多くの入会を希望する次第である。

飯野八幡宮八十八膳神饌の形態は大分復元されたが、多くの課題が残されている。まず、この神饌は本来熟練といつて調理したものと思われる。この調理方法は残されていないため、他の神社に伝わっている調理方法等調査研究し復元を試みたいと思う。

つぎに、濁酒調製があげられる。「定式控」の中に、「一夜酒」として十三日に濁酒を調製し八十八膳神饌として奉献した記述がある。これは税務署との協議の中では認められないとの事であるが、今後とも協議を続けていきたいと思う。

これらの懸案事項を順次解決し、古来よりの八十八膳献饌行事が一日も早く実現できるよう共に努力したいと念づる次第である。

飯野八幡宮 宮司 飯野 光世